

女子大学生が捉える人生のイメージ

—— life perspective からの生涯発達研究の試み ——

徳 田 治 子

1. 問題

我々は、自らが生きる“人生”をどのようなイメージで捉えているのだろうか？生涯発達心理学者の Staudinger (1999) は、心理学が果たす積極的な役割の方向性を探るなかで、人が自らの人生を導き、創造する際に助けとなるような知識や方略を提供していくことをあげている。そして、そのような取り組みを“art of life (生きるという技)”への貢献と述べ、そのために必要な作業として、“life perspective (人生という観点)”という用語を用い、これまでの心理学の中心的研究単位であった「個人」、「行為」、「人格」、「認知」、「発達」に加え、「人生 (life)」というより全人的で価値的な判断を含む概念を単位とした研究を行う必要性を指摘している。

日本でも、生涯発達心理学を推し進めていく上で重要なのは、生涯にわたる人間の発達や変化をどう捉えるかという観点 (perspective) の問題であるとし、生涯にわたる発達のプロセスやエイジングのプロセスの位置づけについて、従来の発達観の見直しや新たな理念モデルの提示がなされている (例えば、小嶋1991；堀1991；やまだ、1995)。なかでも、やまだ (1995) は、「“生涯発達の”とは、単に研究対象として年齢の幅を広げることではなく、何よりも観点の革命」であると述べ、従来の成長－衰退モデルを含む、生涯発達をとらえる6つの理念モデルを提示している (熟達モデル、成熟モデル、両行モデル、過程モデル、円環モデル)。また、イメージ画の分析を通して、我々が日常持っている人生イメージの図式を捉える試みを行なっている (やまだ、2002)。

このようなモデルや“観点”の提示は、人の生

涯に渡る成長や変化を捉える多様な視点の在り方を示すものである。様々な生き方の選択肢や価値観がせめぎあう現代において、“人生”というトピックは、多くの人々の関心テーマである。そのようななか、研究上の理念モデルの提示にとどまらず、日常に生きる我々の人生や生涯にわたる“人生”が、どのようなものとして理解されているかを明らかにしていくことは、自己だけでなく、他者の人生を理解し、支える上で有効な知見をもたらすものであろう。この点において、人生の様々なイメージを捉える試みは、“art of life (人生という技)”に貢献する努力の一つとして位置づけられる。

本研究では、人生のイメージを捉える探索的試みとして、我々が日常において捉える人生のイメージを、メタファーとそのメタファーを用いる理由の記述を通して明らかにする。人々が日常に持つイメージを捉える方法としては、描画をはじめ多様な方法が存在するが、本研究では、言語表現によるイメージを扱うこととし、用いられるメタファーそのものだけでなく、その背後にある暗黙の想定や意味を捉えることを目的に、その表現を用いる理由 (説明) も含め、分析を行う。

2. 方法

対象：東京都内の私立大学に通う女子大学生105名

手続き：「人生とは、_____のようなものである。なぜならば、_____。」という文章を完成するように求めた。なおこれらの手続きは、筆者が担当する生涯発達心理学概論の講義中に行われた。

3. 結果と考察

105名の自由記述をKJ法を用いて分類し、6つの基本メタファーからなる上位カテゴリーと各カテゴリーを構成する12の下位メタファーを抽出した。分類に際しては、人生を示すものとして用いられた言語表現を中心に行った。また、随時そのメタファーを用いた理由に関する説明を参照した。

6つの上位カテゴリーは、それぞれ、『自然メタファー』、『ロードメタファー』、『作品・素材メタファー』、『脆性・結晶メタファー』、『哲学的メタファー』、『その他』であった。各カテゴリーに区分される回答数は表1に示す通りである。

以下では、実際に用いられたメタファーとそれが用いられた理由を参照しながら、各カテゴリーの特徴を考察する。

表1 基本メタファーの分類と回答者数

基本メタファー	下位カテゴリー	回答数 ()内は%	合計 ()内は%
自然	流れ・変化	21 (20)	34 (32.4)
	サイクル	8 (7.6)	
	未知	8 (4.8)	
ロード(道)	行路	10 (9.5)	27 (25.7)
	行程の意味づけ	14 (13.3)	
	乗り物	3 (2.9)	
作品・素材	作品	8 (7.6)	12 (11.4)
	素材	4 (3.8)	
脆性・結晶	脆性	8 (7.6)	13 (12.4)
	蓄積・結晶	5 (4.8)	
命題	課題・成長	4 (3.8)	14 (13.3)
	人生の摂理	10 (9.5)	
その他	その他	3 (2.9)	5 (4.8)
	回答困難	2 (1.9)	
合計			105

(1) 自然メタファー：変化する、広がる、巡る、繰り返すものとしての人生

『自然メタファー』には、海や波、川、天気などの表現を含む「流れ・変化メタファー」、四季や太陽、植物等のメタファーを含む「サイクルメタファー」、宇宙、砂漠、蜃気楼、草原などを含む「未知、無限メタファー」が含まれる。

「流れ・変化メタファー」では、主として海

(波)、川、天気(気象)の3つのメタファーが用いられ、自然の移ろい、変化する様が人生の特徴を示すものとして捉えられていた。海や波を用いた表現では、時に荒々しく、時に穏やかに変化する水面や、寄せては返す波が、人生の良い時や悪い時、気持ちの変化や人生の浮き沈みに準えて表現されていた。また、川や川の流れを用いた表現では、1つの水滴からはじまる川が、やがて小さな潮流になり、次第に大きく、大海に流れ込む様や、その流れをせき止める障害物の存在が、人の発達や加齢にしたがって直面する人生の局面や課題に準えられていた。また、天気や空などを用いた気象に関連するメタファーでは、毎日変化するという気象の特性が強調されていた。

【記述例】

海：時には波のように心が不安定になったり嬉しいことや楽しい時もあったりして、海のようにいつも違う姿を見せるものだと思うから。

海：良い時もあれば悪い時もある。それが波のようにやってくる。そして気もちが穏やかな時もあるし、荒々しい時もある。海も同じ。

海：とても深いものであるし、時には荒れたり、穏やかだったり、様々に変化するから。

川の流れ：生まれ始めは、ちょろちょろと湧き出ているが、だんだん激しくなり時には岩にぶつかったり、止まったり、途中で枯れてしまうかもしれない。そしてまただんだんとゆっくりになり、最後はどの川も共通の海になる。

天気：晴れてると思ったら急に天候が悪くなったりして、様々な変化をあらわすから。

空：毎日違う。どんどん変化していく。

「サイクルメタファー」では、四季の移り変わりや太陽の昇降、植物の成長のプロセスが、人の一生や生命の循環を示すものとして捉えられていた。「サイクルメタファー」では、「変化・流れメタファー」と同様、時間の推移による変化が言及されるとともに、各々の変化をある連続したひとつの段階として位置づけ、その推移や各発達段階に特有な意味づけがなされていた。

【記述例】

日本の四季：その時によって楽しみ方が変わったりするもの。夏には夏の、冬には冬の楽しみ方や良さがある。それと同時に夏には夏の、冬には冬のつらさもある。

太陽：生まれたばかりの赤ちゃんは朝日のようにサンサンとまぶしくて、昼になる（10代、20代）につれて光が落ち着いてきて、夕方になると（50代、60代）、まっかな夕日が穏やかに照らしてるから、生活も穏やかになっていったから。
花：生まれてから（種～発芽）周りの影響などからどんどん成長していき、社会に出て働き（開花）、そして年老いて最後に終わる（枯れる）。その間に家庭を作ったりする（種）。

「無限・未知メタファー」では、宇宙や砂漠・蜃気楼が、無限で未知な対象として位置づけられるとともに、そのような特徴が、個人のもつ能力や可能性の広がりや多様性、及び、それ故の予測困難さを指し示すものとして用いられていた。

【記述例】

宇宙：宇宙は無限に広がり続いていて、未だ解明できていない部分がある。人生もわかるようでわからない、身近にあるようでないよう理解しがたいから。

砂漠と蜃気楼：砂漠は歩いてても歩いてても先が見えないし、見えたと思って行くと蜃気楼だったりするように、人生もこれから何が起こるかわからないし、理想を思い描いても、結局違うことが多いから。

(2) ロード（道）メタファー：人が歩み、進むものとしての人生

『ロード（道）メタファー』は、道や迷路などのメタファーからなる「行路メタファー」、旅、マラソンや長距離走、障害物レース、山登り、冒険・宝探しなど、歩み、進む行程の種類やその意味づけによって特徴づけられる「行程の意味づけメタファー」、カヌー、自転車、車など、それらの行程を行く際に自らが操縦する「乗り物メタ

ファー」の3つに区分される。

「行路メタファー」では、人生の行程を1本の道や迷路になぞらえ、その道筋の様々な特徴が、人生上に生じる出来事や人生の局面に準えて表現される。例えば、道の分岐点や枝分かれは、人生の選択場面に、道の途中にある障害物は、人生の困難や危機の場面に準えられていた。また、道の先にある目的地やゴールについては、多くが、明確に定めず、その行き方についても一通りではなく、何通りもあると表現していた。

【記述例】

道：成長して、自分で自分の人生を決める時、多くの選択肢があってそれがまるで道の分かれ道のように、またどこまでも続いていくから。

行き方が何通りもある迷路：迷路には数通りの生き方、その先には1つしかゴールへの道がないが、どんなふうに行くかはその人なりの生き方があり、失敗や経験のための行き止まりがある。それでも初心に戻ってやり直し、最後には成長するだろうから。

迷路：様々な経験を積んでたどっていく人生。選択する道は多く、またその道は延々と続いていく。

これに対し、「行程の意味づけメタファー」では、旅、マラソン（長距離走）、障害物レース、山登り、冒険等、自らが歩み、進む行程に関する明確な目的や意味づけが付された表現が用いられ、その行程をやり遂げた後の“成長”やゴールにたどり着く達成感が明確に述べられていた。

【記述例】

旅：人生は、旅のように、自分の知らない場所、知らない人との出会いによって、成長していくものだと思う。人生を変えてしまうくらい大切な出会いもあれば、会話を少しかわしただけの出会いもあると思うけれど、人は人との出会いによって成長していくと思う。

マラソン：生まれるのがスタートで、死ぬ時がゴール。人によって距離が違うから、その人にしかできないことがあるのだと思う。マラソンでゴール

した時の達成感を人生のゴールの時に得られたらと思う。

障害物レース：今まで生きてきたなかでも、たくさんの障害にぶちあたった。その時その時で、私は考え、少しずつでも心も体も成長したように思う。これからも障害に出会ったら、もっと成長していくような気がする。

登山：今まで登山を何度か経験した。山頂に辿り着くまでの間、心身ともに非常に辛い状態に追い込まれる事が何度もある。その度に、自分を奮い立たせ、自分を信じ、またきれいな花や景色、友人等の存在が励みになり、前進することができる。そのような思いをし、山頂に到達した時の喜びはひとしおで、自分に自信をつけることができる。困難を克服し、目的を達成していくところが人生と似ていると思う。

冒険：新しいことにチャレンジしたり、そこで苦労や挫折を経験し、またそれを繰り返す。1度経験して分かったことはこれから生きていく上で教訓となる。冒険するといろんなことが分かるから人生のようだと思う。

また、人生という行路を進む際に利用する乗り物を人生に準える「乗り物・運転メタファー」では、用いられる乗り物の特性ではなく、運転という行為を中心に説明づけがなされる。自己は、操縦（運転）する主体として、それらを操り、コントロールする者として位置づけられる。

【記述例】

カヌー：自分でこがなきゃ進まないし、自分がなんとかしないと流されてしまう。また誰か一緒に漕いでくれる人がいると進みやすい。

自転車：こがないと止まるし、山を上る時はなおさら辛い。自転車で走る道は、人生の道で、自転車を漕ぐのは自分である。

(3) 作品・素材メタファー：個々のかけがえのない作品としての人生

『作品・素材メタファー』は、物語・ドラマ・歴史、絵画などの表現からなる「作品メタファー」

と真っ白な画用紙、粘土等からなる「素材メタファー」に区分される。

このうち、「作品メタファー」では、一つの物語や歴史、絵画など、自らの手によって作り上げられる作品としての人生のかけがえのなさやオリジナル性が、強調される。

【記述例】

一つの物語：人生は生まれてから死ぬまでが、一つのお話になっている様な気がします。自分自身の歴史：生まれてから死ぬまでの喜び、悲しみ、またいろいろな体験を心にしまい込むから。他の人とまったく違う自分だけの歴史だから。

これに対し、「素材メタファー」では、作り上げられた作品そのものの価値や希少性よりも、作品を作り上げる際の自由度、可能性や作り手の能動性、責任など、創造するという行為や創造の主体としての自己の側面が強調される。

【記述例】

真っ白な画用紙：それは、誰かが決めるものではなく、自分が自分の手で描いていくものであるから。人生とは、自分でどんなふうにもすることができるものであると思う。

粘土：こねればこねるほど、いろんな形にしやすい。何を造るか決めたら、それをイメージしながら形をかたどってくっつけたり、切り離したり、各々の物ができる。手を抜けば、かちかちになって使い物にならなくなる。

(4) 脆性・結晶メタファー：貴重なもの、はかないもの、時間的蓄積、結晶としての人生

『脆性・結晶メタファー』には、線香花火、ガラス細工、万華鏡などから構成される「脆性メタファー」と鍾乳洞、金平糖などの表現からなる「漸次・結晶メタファー」が含まれる。

「脆性メタファー」では、線香花火やガラス細工のもろさや繊細でこわれやすいという特性が人生の刹那的な側面やはかなさを指し示すものとして表現されていた。

【記述例】

線香花火：途中でぱっと光ってあとは静かに消えるだけというところが人生みたいと思った。

ガラス細工：光に当たるととてもきれいだけれども、落としたりしてしまうとすぐに壊れてしまうところがそっくり。

一方、「蓄積・結晶メタファー」では、「鍾乳洞」、「こんぺいとう」等の時間をかけて形を成すという特性が、ゆっくりと時間をかけて成し遂げられるものとしての人生の側面を表すものとして用いられていた。

【記述例】

鍾乳洞：少しずつ少しずつ、常に前に進んでいくものだと思うから。鍾乳洞は上から1滴1滴落ちてきて、下の方がだんだんのびていく、形をかえていくものだから。

こんぺいとう：最初はすごく小さくて、だんだんいろいろついてきて最後はキラキラかわいくなるから。

(5) 命題メタファー：課題・成長、終局としての死や喪失と関連づけて捉えられる人生

『命題メタファー』には、勉強や努力などによって表現される「課題・成長メタファー」と死や喪失などとの関連で生を位置づける「人生の摂理メタファー」が含まれる。これらのカテゴリーに含まれるメタファーは、各々「人生とは何か」という哲学的、形而上学的命題に対して、人生の本質を定義するかたちで提示されていた。

「課題・成長メタファー」では、苦労したり、悩んだりしながら、課題を乗り越えたり、学ぶことを通して成長することが、人生の本質を成す主題として位置づけられていた。

【記述例】

日々勉強：いろんなことを経験して悩んで学ぶことがあるから。

階段：人生はきつと、全部苦悩なのだと思う。よく“苦あれば楽あり”っていうけど、自分で試行

錯誤して、壁にぶちあたった時にどうするか、自分なりのやり方でその問題を乗り越えていく。きつとどんな好きなことをしていても、挫折することはあると思う。そこで自分で何もしなければ、いっこうに先に進まないと思う。だから、くじけず、頑張っていかなければならない。

これに対し、「人生の摂理メタファー」では、生と死、正と負、帳尻、選択における獲得と喪失など、相対する要素を並列して捉えることを中心に、人生の道理や摂理を定義する表現がなされていた。

【記述例】

死ぬまでの猶予：そのなかで自分を創造し工作していく。生きているのに、生きているから死ななければならない不思議。なぜ永遠に生を持ち続けられないのか。

プラスマイナス0：生きているうちに良いこともあれば、悪いこともある。失敗もあれば、喜びもあれば、悲しみもある。感じ方や各々の大きさは人によって違うけれど、人生の最後に過去を振り返ってみれば、プラスマイナス0になっていると私は思う。

進むにしたがってせばまる深い穴：生きていくということは常に何かを選びとってゆくということだから。それは言いかえると選び取らなかったものを捨てていくということで、選び取らなかったものを捨ててゆくということで、選択しみたいものの広さは「せばまる」けれど、その奥深さは「深くなる」と思う。

(6) その他

その他には、「アメリカ」（何が起きても不思議じゃないイメージがあるから。自由自由って言いながら、法律がたくさんあって、裁判もいっぱいあって、自由って言いつつも、実は枠にはまったりしてんのかなあって）や「ストレス」（最近の世の中ストレスが非常にたまるから）など、現代社会への批判的観点からの記述等が含まれていた。また、「うまく答えられない」と回答したも

のが2名いた。

4. 総合考察

本研究では、言語表現によるメタファーとその説明づけを通して、我々が日常とらえている人生のイメージの特徴を探った。その結果、「自然メタファー」、「ロード（道）メタファー」、「作品・素材メタファー」、「加工物メタファー」、「命題メタファー」の5つの基本カテゴリー（基本メタファー）を特定した。また、それぞれの基本メタファーを用いた理由の分析を通して、“変化する、広がる、巡る、繰り返すものとしての人生”（「自然メタファー」），“人が歩み、進むものとしての人生”（「ロード（道）メタファー」），“個々のかけがえのない作品としての人生”（「作品・素材メタファー」），“貴重なもの、はかないもの、時間的蓄積・結晶としての人生”（「脆性・結晶メタファー」），“課題－成長、終局としての死や喪失と関連づけて捉えられる人生”（「命題メタファー」）等、それぞれの基本メタファーで強調される人生のイメージの諸特徴を明らかにした。

本研究が示した結果をどのように解釈し、先行研究で示された知見と結びつけるかは、それ自体今後の大きな課題と言える。例えば、やまだ（2002）は、大学生を対象に「あなたの人生をイメージして一枚の地図を書いて下さい。」という指示のもと描かれたイメージ画の分析を通し、山登りや階段によって代表される「進歩型の人生イメージ」とリンゴの木の実が生成し、土にかえり、またリンゴの木の養分として吸収される様を描いた「（生命の）循環モデル」の存在を特定している。そして、数としては、前者の「進歩型のイメージ」が圧倒的に多いことを認めながらも、後者の「循環モデル」を従来の発達観に還元されない人生イメージとして積極的に評価している。これら2つのメタファーは、本稿で明らかにされた「行程の意味づけメタファー」と「成長－課題メタファー」、「サイクルメタファー」と各々重なる特徴を有している。しかしながら、本研究が示した結果においては、やまだ（2002）が指摘するように、必ず

しも、「進歩型の人生イメージ」が圧倒的に優勢とは言えない。また、本研究では、両者に還元されない様々な人生のイメージを明らかにした。これらの結果が、人生イメージを捉える方法論的な差異による違いなのか（描画と言語表現）、あるいは対象の属性による違い（性別や年齢、発達段階等）を反映するものなのかについては、今後さらなる探究を行なうことが必要であろう（例えば、「進歩型イメージ」は青年期に顕著なものか、本研究で見いだされた「流れ・変化メタファー」は日本の自然観や風土に特有のものなのか等）。

また、Vilkko らは（Ruth, & Vilkko, 1996; Vilkko, 1994）、フィンランド女性の自伝に通底する人生イメージを明らかにする試みにおいて、人生についての語りとその背後にあるメタファー、およびその文化・歴史的要因について考察を行っている。分析を通して Vilkko らは、道、道路、川などを含む「旅（journey）メタファー」、四季、虹などを含む「弓状（arch）メタファー」、布、キルト等を含む「織物（fablic）メタファー」を特定し、これら3つのメタファーを、人生イメージの根底にあるルートメタファー（root metaphor）として位置づけている。また、人生の語りとの関係については、それらのルートメタファーが実際に用いられる個々の言語表現（自伝での語り）において、個人が生きる社会、文化、歴史的文脈を如実に反映した表現がなされることを指摘している（例えば、国全体を襲った恐慌という歴史的事件を経験した女性が、自らのみじめな境遇を指して「ぼろ切れのような敷物」と表現する等）。個人が人生を捉える際に用いる言語表現とそれを用いる個人の現実の人生や生活状況との関連については、個人が生きる社会文化的要因や人生の局面や年齢などの要因にも注意を向けながら、今後さらに探求していく必要があると思われる。

最後に、本稿で報告した調査は、生涯発達心理学の講義のなかで行われ、翌週、すべての回答の概略をまとめた資料を学生に配布した。その資料を読み、学生に感想を求めたところ、自分以外の同年の人生のイメージの多様さに感嘆の意を表す

るとともに、それを共有することで自分の考えがより明らかになった、他者と異なるということの豊かさに気づいたとの感想を得た。これらの感想は、多様な人生のイメージの共有が自己理解や他者理解へとつながる契機となる可能性を有していると思われる。

参考文献

- 小嶋秀夫 (1991). 生涯発達についてのいくつかの論点. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、38、27-31.
- 堀薫夫 (1991). 生涯発達論と教育. 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)、38、16-19.
- Ruth, Jan-Erik., & Vilkkö (1996). Emotion in the construction of autobiography. In Magai, C., McFadden, S. H. (eds). Handbook of emotion, adult development and aging (pp. 167-181). Academic press.
- Staudinger, U. M. (1999). Social cognition and apsychoological approach to an art of life. In Hess, T. M., & Blanchard-Fields. (eds.). Social cognition and aging (pp.343-375). San-diego: Academic Press.
- Vilkkö, A. (1994). Homespun life: Metaphors on the course of life in women's autobiographies. Culturalstudies, 8, 269-278.
- やまだようこ (1995). 生涯発達をとらえるモデル. 無藤隆・やまだようこ (編). 生涯発達心理学とは何か: 理論と方法. 講座 生涯発達心理学 第1巻. 東京 (pp.57-92). 金子書房.
- やまだようこ (2002). 生涯発達心理学の課題と未来. 小嶋秀夫・やまだようこ (編). 生涯発達心理学. 放送大学出版協会. 203-224.